

「後で考え直してでかける」

マタイによる福音書 二二章二八―三二節

南山教会 二〇二五年一〇月一九日

大塚 勁

「急がば回れ」や「勝つて兜の緒を締めよ」「失敗は成功のもと」といったことわざがあります。どちらも、一見すると遠回りや控えめに見える歩みの中にこそ、ほんとうの知恵や力があるという日本のことわざです。焦って進むよりも、一度立ち止まり、考え直すことの中に確かな道がある。それは、聖書が語る信仰の姿にもどこか通じているように思います。

キリスト教は、しばしば「逆説の宗教」と呼ばれます。逆説という言葉はギリシヤ語の「パラドクサ」の訳語として使われています。原意は「予想外のこと」「思いもよらないこと」という意味をもっています。一見通念に反しているようで、実は真実を言い当てている言葉です。そのような言葉が聖書には多く登場するのです。イエスは、私たちが常識と思うこととは逆のことを語られました。

「心の貧しい人々は幸いである、天の国はその人たちのものである」。(マタイ五・三)

「だれでも高ぶる者は低くされ。へりくだる者は高められる」。(マタイ二三・一二)

弟子たちが子どもたちを遠ざけようとしたとき、イエスは言われました――「子どもたちをわたしのところに来させなさい」。(マタイ一九・一三―一五)

そして何よりも、大きな苦しみ・困難であった、十字架の死が、すべての人の救いの出来事となりました。強さではなく、弱さのうちにこそ神の力が現れる。この“逆説の中にこそ福音がある”という真理が、イエスの歩みそのものでした。

神学生時代に聞いた説教の中で、印象に残っている話があります。

「信仰は山登りのようなものです。どこから登り始めても、いつ登り始めても、辿り着く頂上は同じです。」信仰の入口には、早い人もいれば遅い人もいます。

最初から『はい、行きます』と応える人もいれば、いったん背を向けてから『やっぱり行こう』と考え直す人もいます。幼児洗礼を受ける人もいれば、人生の最後に洗礼を受ける人もいます。信仰することに遅すぎるということはないのです。そのどちらの歩みも受け入れてくださるというのです。

今日のたとえ話には、父親と二人の息子が登場します。聖書には父親やぶどう園がよくたとえ話ででてきますが、父親Ⅱ神、ぶどう園は天の国としてあらわされます。

父親はそれぞれの息子に、「ぶどう園に行つて働きなさい」と言いました。

一人目は「いやです」と答えましたが、後で考え直して出かけて行きます。

もう一人は「行きます」と答えましたが、結局行きませんでした。イエスは問われます。「この二人のうち、どちらが父親の望みどおりにしたか？」人々は答えます。「最初の息子です。」イエスは言われました。「はつきり言つておく。徴税人や娼婦たちの方が、あなたたちよりも先に神の国に入る。」ここには、信仰の本質を照らす大切な真理があります。それは「考え直す」ことの中にこそ、神の恵みがあるということです。

「考え直す」とは、ただ反省するということではありません。心の向きを変える、方向転換をすることです。聖書では「悔い改め」という言葉がよく使われますが、ギリシア語の「メタノイア」は“心を変える”“考えを改める”“視点を変える”という意味を持っています。つまり、最初に「いやだ」と言つても、後で心が動かされて方向を変えた人が、考え直した人が、見方を変えてみた人が神の望みを行う人なのです。

人生の中で、すぐに「はい」と言えないことがあります。信仰のこともそうです。神の呼びかけに「今は無理です」「私はふさわしくありません」と答えてしまうことがあります。信仰の大先輩であるモーセも、出エジプトへと神から送り出される時、すぐには従えませんでした「ああ主よ。どうぞ、

だれかほかの人を見つけてお遣わしてください。」(出エジプト四・一三)でも大切なのは、その後です。

神の言葉が心に残り、何かのきっかけで「やっぱり行こう」と思えるとき。その“後で考え直す”瞬間こそ、神の恵みが働いているときなのです。父親は息子が「いやです」と答えたときも、すぐに怒ってはいません。むしろ、待つていました。息子が考え直し、出かけていくのを待つていたのです。神さまもまた、私たちが“考え直して出かけていく”のを静かに待つておられます。「神は忍耐強いお方だ」と聖書は語ります。神は、私たちが変わるのを、あきらめずに待ち続けてくださいます。たとえ一度は背を向けても、遅れても、遠回りをしても、呼びかけ続けて下さっています。

この譬え話の結びで、イエスは徴税人や娼婦の名を挙げました。神は、すぐに「はい」と言えない私たちを見放しません。「後で考え直して出かける」人を、神は喜んで受け入れてくださる。神の恵みは、最初の返事よりも、その後の心の変化を大切にされるのです。

そしてこの神の忍耐の愛こそ、イエスが語ったことではないでしょうか。イエスは譬えの最後にこう言われます。「徴税人や娼婦たちが、あなたがたより先に神の国に入る。」それは、社会の中で“遅れている”と思われた人たち、

失敗し、つまづいた人たちこそが、後で考え直して、神のもとに立ち返ったということです。神の国は“早い者勝ち”の世界ではありません。むしろ、遅れてもなお招かれている世界です。一度背を向けても、神はその人を待ち続けておられる。その姿は、遠くから息子の帰りを待つ放蕩息子の父のようでもあります。神の愛は、私たちの「いま」よりも、「これから」を信じておられるのです。社会から罪人とみなされていた彼らが、神の国に先に入ると言われたのです。彼らは最初、「いやです」と言った人たちのようでした。でも、ヨハネの説教を聞き、イエスの愛に触れる中で“考え直した”のです。人の目には遅く見えても、神の目には、そこにこそ信仰の第一歩がありました。

私たちもまた、日々の中で「いやです」と心の中でつぶやいてしまうことがあります。

祈ることも、赦すことも、誰かに仕えることも、面倒に感じる時があります。でも、そんな私たちを神は責めず、待っていてくださいます。

「考え直して出かける」——その小さな一步を、神は喜んでくださるのです。

イエスの語る福音は、いつも逆説的です。苦難の十字架が、救いとなり、貧しさのうちにこそ、真の富が与えられ、子どものような小ささの中に、神の国が開かれていく。そして、最初に拒んだ者が、後に神の国へと入っていく。それが、神の愛の深さであり、恵みの広さであると聖書は語ります。

「後で考え直して出かける」それが、遅すぎることは決してありません。

わたし達もまた与えられている恵みを立ち止まって考え、出掛けて行く一人一人でありたいと願います。